

古代史に遊ぼう

第31回 -藤ノ木古墳を訪ねて その1-

藤ノ木古墳では1985（昭和60年）から1988（昭和63年）の3年間に第1次～第3次の学術調査が奈良県立橿原考古学研究所と斑鳩町教育委員会によって行われた。私はその頃に奈良市に移り住んだのだが、考古学の発掘が常に大きく報道される現在ほどではないが、それでも新聞の地方欄に藤ノ木古墳の紹介記事が詳しく掲載されていた。たまたま、友人を法隆寺に案内する機会があり、そういえば近くに話題の藤ノ木古墳というのもあったかと、田圃のなかの細道を訪ね訪ね苦労して歩いて行ってみたいところ、立ち入り禁止の簡易柵で囲われた荒地のなかに、所々ブルーのシートを被せられたうす汚い凸地が見えるだけで失望して帰ってきたことがある。

その7年後、同窓会支部の幹事として橿原考古学研究所附属博物館の見学を企画した。特に目的があったわけではなく、京都・大阪方面は企画が種切れだから奈良でと云うことで、久米寺周辺の散策と面白いという評価のあるこの博物館見学となったわけである。初めて訪問したそこには古代史の考古学的資料が系統的に展示されていた。参加者はいろいろの分野の人がおり、それぞれ学んだ専門領域によって興味を持つことが違っているので、見学は予定よりも大幅に時間を超過してしまった。その時、参加者全員が等しく興味を示したのは藤ノ木古墳からの出土品を展示する一室であった。調査に何年もかけて慎重に取り出された金銅製の冠、大帯、沓などや馬具が展示されていた。出土品そのものに興味をもつのは当然のことだが、それよりも出土品を現在の工芸技術で復元したレプリカのきらびやかさが印象に残ったことを記憶している。

2年前、古代史探訪のグループで竜田川、大和川に沿った神社・旧跡を訪ねる途中に、法隆寺西円堂と藤ノ木古墳に立ち寄る機会があった。東西に長大な寺域の西端にある西円堂は東端の東院円堂（夢殿）と対を成しているが、法隆寺に詣でる人々がかならず夢殿に立ちよるのに反して、薬師如来を祀るこの西円堂に立ちよる人は統計的に極めて少ないという。一説によれば、円堂とは悲惨な死をとげた人々の霊を祀るための堂であるという。東院円堂（夢殿）は直接には山背大兄王とその子供達、間接には聖徳太子に捧げられた堂であるに対し、西円堂は藤ノ木古墳の被葬者に捧げられた鎮魂の施設であるというのである。その藤ノ木古墳は法隆寺の南大門から西へ約350mのところにあるが、今回行ってみると約30年前に苦労した田舎道は舗装されて直行すると古



●藤ノ木古墳

墳があり、途中には国の史跡としての案内板も設けられていた。墳丘の周辺は全く様変わりし平坦な芝地に整備され、その真ん中に復元された直径50m以上、高さ9mの円墳が優美に建っていた。

また、入手した資料によれば斑鳩町は文化財センターを設けて、藤ノ木古墳の発掘の経緯の映像による説明や代表的出土品のレプリカをわかりやすく学習できるように展示しているとのことであった。そこで、改めて藤ノ木古墳、斑鳩町文化財センターおよび橿原考古学研究所を1日で回って集中的に学習することを計画し、藤ノ木古墳の発掘に関わる技術的記録、多彩な出土品に関わる考証および被葬者に関する議論などの文献をレビューしたうえ再々訪し、収穫の多い初夏の1日を過ごすことができた。

藤ノ木古墳は「陵山」とも呼ばれ、発掘調査される以前は墳丘より採集される埴輪の特徴などから古墳時代中期（5世紀）の古墳と考えられていた。墳丘には柿などの果樹が植えられており、墳丘頂部に天井石の一部が露出していた。そして、石室の開口部は意味深にも当時の宮のあった磯城・磐余地域の方角を指している。現在開口部は扉で閉ざされているがセンサーが設置され、近づくとも内部で点灯して窓越しに玄室内を見ることができ

第1次調査（1985）の結果、埋葬施設は大型の横穴式石室で、全長13.95m、玄室高4.41mで、同時期のものとしては最大級であることが判明した。閉塞石の残存状態は良好で、石室床面の礫の下には排水溝が巡っていた。剝抜き式家形石棺は、その表面に色鮮やかな朱が塗られており、未盗掘である可能性が高いと予想され、その調査への期待が高まった。石室の奥壁と石棺のわずかな隙間から、金銅製馬具が出土したほか、

石棺周辺からは鉄鏃や挂甲等の武器・武具が出土した。また、石棺袖部には埋葬時祭祀に使用したとみられる須恵器や土師器がまとめられていた。出土品のうち「金銅製透彫鞍金具（後輪）」に代表される装飾性豊かな馬具は、これまでに類例のない物で「藤の木」は一躍世界から注目される古墳となった。

第2次調査（1988）として墳丘調査およびファイバースコープを使用する石棺内の状況確認が行われた。その結果、石棺内には水が溜まっていること、その中の金属製品や人骨などが確認された。これは先端技術を考古学に応用した初期の実例であり、水中に見える金属製品の映像の公開なども行われ、未盗掘であることがほぼあきらかとなった。

同年度内に行われた第3次調査は石棺の蓋を開ける開棺調査である。吊り上げて棺蓋を開けると、石棺の内部も全面朱で塗られており、溜り水の表面に繊維片が浮遊していた。石棺内の水を取り除くと、埋葬当時の状態で二体の人物が合葬されて居ることが明らかになった。人骨の調査では、北側の人物は17～25才の男性で、南側は20～40才の男性の可能性の高い人物と考えられている。検出された副葬品はおびただしい量で、被葬者の権力を示す金銅製品（冠・大帯・杵など）のほか太刀や剣などの武器類、銅鏡、色とりどりの大量の玉類、綾錦をはじめと豊富な織物類などであった。

第4～6次調査（2000・2003・2004）では、横穴式石室の後道閉塞部の確認調査、墳丘の規模と形および墳丘南側裾部の大日堂推定地周辺調査が

相次いで行われ、閉塞石の積上げ構造と古墳造営過程での石室への出入りのための斜路の存在が推定されること、および直径50m以上の円墳であったなどの調査結果が得られた。

斑鳩文化財センターを訪れて、まず目を引くのは展示棟玄関横の赤い家形石棺レプリカ（原寸大）である。その横の説明板には石棺内出土状況が模式図によってわかりやすく説明されている。玄関から展示室に行く通路は横穴式石室を模して作られており、壁には岩の断面、床には礫が描かれており、玄室の奥には赤い石棺が見え、藤の木古墳の窓から薄明かりでのぞき眺めた景色が再現されている。ホールでは約20分で発掘の記録をわかりやすい映像で見ることができ、展示室には出土品のレプリカが展示されている。

引き続き車を飛ばして、印象の薄れぬうちに橿原考古学研究所付属博物館を訪れ、藤の木古墳出土品とそれを現在の技術で再生復元した光まばゆいレプリカをじっくりと眺めて、一日の仕上げとした。

藤の木古墳の築造年代は、出土須恵器や馬具類の年代、家形石棺の形式、横穴式石室の形態などから570～580年とする説が定着しつつあるという。未盗掘の石棺は、六世紀の後半のタイムカプセルとも云うべきもので、喪葬儀礼だけではなく、副葬品から当時の思想・文化までも知る手がかりである。ただし、石棺内に二体が同時に合葬されたのか、時期を隔てて追葬されたのかは問題を残しており、被葬者論とともに今後の検討課題である。時代は朝鮮半島南部の支配・領有を巡って、百済、新羅そして倭国の間で、外交交渉や軍事対立が繰り返され、やがて新羅の優位が確立する歴史的背景にあった。

被葬者は、欽明の皇子とするのが最も妥当性が大きい想定とされている。法隆寺の古文書には「崇峻天皇の陵」とあるとのことであるが、これは最近では疑問視されている。「崇峻陵」としては宮内庁指定の「倉梯岡陵」は疑わしいが、多くの研究者は崇峻天皇陵を「赤坂天王山古墳」とみている。被葬者についての新説としては朝日新聞（2013年6月14日朝刊）に載った「小姉君（欽明天皇妃、崇峻天皇母、聖徳太子祖母、蘇我氏出）とその息子の茨城皇子が葛城皇子の合葬墓」という京都橘大・猪熊名誉教授の説がある。

（岡野 実）



●藤ノ木 家形石棺レプリカ

文献1) 藤の木古墳をめぐる課題 京都新聞創刊110年記念国際シンポジウム 第2部

基調講演（1989. 11. 4/5）

2) 古墳と被葬者の謎にせまる 大塚初重 祥伝社（2012）